

三代目が掲げる 新経営戦略



辰己屋金属
代表取締役社長
奥出 眞通
おくで まさみち

銅や黄銅、アルミ、ステンレスなどの非鉄金属材料の販売や、切削加工やパイプ曲げ加工などを手がけている辰己屋金属。大阪市内で創業してから82年という長い歴史をもち、全国各地の大手企業から零細企業まで幅広く金属を提供してきた。2017年6月、新社長に就任した奥出眞通氏は、三代目だ。新たなかじ取りをまかされた同氏に、今後の経営方針などを聞いた。

**自身がトップ営業として
背中を見せたことが奏功**

— 82年の長い歴史をもつ、辰己屋金属の強みはなんでしょう。

「加工会社」と称し、メーカーと商社という、ふたつの機能を有していることです。スピーディかつ大量の材料発注にも対応し、付加価値の高い加工を心がける。それを繰り返して、顧客からの信頼を得てきたことが強みですね。

先代である父親が、祖父から会社を引き継いだのが、ちょうど私と同じ42歳のとき。当時は従業員数10名で売上高が15億円でした。そして私が引き継いだ現在では、従業員数が60名で売上高は今期

“加工会社”として日本一 いや、世界一をめざします

30億円を見込んでおり、おかげさまで順調に推移しています。

— 2017年の6月に、社長に就任しました。社内外の反応はいかがでしょう。

就任当初は不安でしたが、約5年前から着々と準備していたこともあり、好意的に受け止めてもらっています。

とくに、従業員の期待をヒシヒシと感じます。私には、社長に就任する前から大手企業を新規開拓したり東京営業所を立ち上げた



辰己屋金属の 歩み

- 昭和10年2月 大阪市港区で辰己屋商店として創業
- 昭和49年1月 辰己屋金属株式会社に社名を改める
- 昭和50年10月 現：本社住所の東大阪市に移転
金属材料のスリッター加工を始める
- 昭和56年4月 パイプ加工全般を始める
- 平成元年4月 現：京田辺工場へ切削工場を移転
- 平成16年3月 KESステップ2 環境マネジメントシステム
スタンダード認証取得
- 平成17年4月 ISO 9001認証取得
- 平成20年3月 東京営業所を開設
- 平成29年6月 奥出眞通氏が社長に就任
- 平成29年11月 新工場(第二工場)建築着手、竣工
同時に京田辺第三工場を取得

難しい加工を可能にする
チズンマシナリー製のCNC
自動旋盤「L32シリーズ」



電極用のプレス部品とエコーラスを加工した辰己屋金属印章。こうした加工も手がける

りと、トップ営業として会社をけん引してきた自負があります。従業員はその背中を見てきたので、「三代目と一緒に会社を盛り上げていこう」と、士気が高まっているのです。実際に、今年の1月から8月まで、連続して目標を達成。順調なスタートダッシュができていますね。

**— IT化を進めつつ
先人の想いは守る**

— 新社長として、どのような経営
を行っているかと考えていますか。

時流を読んで、改善すべきところは徹底的に改善します。たとえば、ITの活用。これまで自社HPの改善は何度か行ってきましたが、もっとマーケティングや採用に活用できるよう磨き上げていきます。また、SNSを日常業務に取り入れ、承認業務やアドバイス、悩みの相談にのるなど、従業員とのコミュニケーションをスピーディかつ円滑に図っていく予定です。その一方で、変えてはいけない普遍的なものもあります。

— それはなんでしょう。

「大家族主義のアットホームな社風」「先人たちの誇り」「たゆまぬ努力と多大なる感謝」の3つです。これらは、先人が築き上げてきた、辰己屋金属の在り方ともいえるべきもの。この3つは、後継者である

私が守らなければならない、いけばん大事なものだと胸に刻んでいます。

— ほかに経営で重視しようとしているものはありますか。

従業員に「あいさつ」「礼儀」「お礼」を徹底してもらうことです。IT化が進んでも、いつの時代も変わらないのがヒト。ヒトを通じてビジネスをするうえで、この3つは必要不可欠です。これらと、ITとうまく融合させることで顧客満足度を追求していきます。

一方で、従業員満足も重視します。経営者である以上、従業員にやりがいや幸せを提供する義務がありますから。たとえば制度面でいうと、子ども手当の検討など、従業員ができるだけ長く働ける環境を整えていきます。

— 今後の目標を教えてください。

私が60歳になったとき、100周年を迎えます。そこで、切りよく従業員数100名、売上高100億円が目標。しかし、それはあくまで通過点にすぎません。この目標を私の代で必ずやり遂げて、150年、200年と続く組織づくりを行っていきたくですね。

そして、加工会社で日本一、もっと大きく世界一をめざします。当社にはやる気と情熱をもったメンバーが集まっているので、それに共感できる新卒の学生はぜひ一緒に働いてほしいですね。